

文科大臣：1994（平成6）年に一年間の変形労働制が導入された際の労働省通知では、突発的なものを除き、恒常的な時間外労働はないことを前提とした制度。公立学校においては、まず業務の削減を徹底した上で、学校行事等のあらかじめ予想される時間外勤務について、勤務時間を延長し、それを一時間単位で積み上げて長期休業中に休日のまとめどりをおこなうもの。制度の趣旨に合致する。

横沢議員：今年9月OECDが発表した「図表で見る教育」2019年度版によると多くの国で学級規模が縮小され、教員の給与水準が上がっている一方で、日本は学級規模が横ばい、教員の給与水準は、ギリシャ、イギリスに次いで下落率が高かった。OECDの教育・スキル局長は、教員給与を見ると教員は魅力的な職業になっていない、優秀な人を誘致できるか疑問が残る、教育の質は教員の質だと忠告したいと述べている。

文科大臣：教師でなければできないことに教師が集中できるように働き方改革の強力な推進による業務の縮減をし、その成果を社会に示しつつ、3年後に教師の勤務実態状況調査を実施しその結果を踏まえながら、教師に関する勤務環境について、給特法など法制的な枠組みを含め、検討したい。

様々な矛盾や課題も含んだこの問題については、更に学習を深めていかなければなりません。制度導入の前提に勤務時間の縮減がなければならぬことは明らかです。これからも、私たちの働き方について議論をしていくことが重要です。

平和を守り 真実をつらぬく 民主教育の確立を 岩手高教組第67次 岩手県教組第72次 教育研究集会

11月9・10日の両日、花巻市で開催しました。2日間の参加者はのべ254人、レポート数は167本で、各分科会で活発な討議が行われました。

日本大学教授の末富芳さんの『『すべての子ども』のための子どもの貧困対策—子どもの権利・ウェルビーイングの視点からの法改正—』と題した記念講演は、「すべての子ども」が切り口でした。貧困は、「貧」と「困」に分けて考えると問題のゴールが見えやすくなり、「貧だけど、困っていない人」、「貧ではないけれど、困っている人」という捉えもできます。その視点で考えると、「すべての子ども」のための援助ということが、納得できるという内容でした。末富さんからの、「貧困問題のゴールはどこか」という問題提起に対して、会場からは「貧困率の低下」などの答えがつぶやかれましたが、末富さんからは、「子どもの幸せ（ウェルビーイング）である」と、答えがありました。法整備に関わるとりくみなどについてもお話があり、この問題の改善に向けてとりくむべき事柄が私たちの身近に、たくさん存在していることに気づかされた90分の講演でした。

夕食交流会では、花巻農業高分会の田巻晃さんから、これまでの教研活動の思い出などについてのお話とともに乾杯のご発声がありました。その後は歓談となり、発表されたレポートの内容や、普段の授業実践についてリラックスしながらも熱心に話をする姿が見られました。また、歓談の中では、高退連の吉田矩彦新会長や、高教組特別執行委員の千葉悟郎さんから、ご自身の現役の頃の教研の様子や、現職に期待することなどのご挨拶もありました。自分の実践や考え方を振り返り、新たな気づきを得た2日間の学びの機会となりました。運営にあたった推進委員のみなさん、お疲れさまでした。来年も多くの皆さんの参加をお待ちしています。

